

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

フォレスト・ガンブ 一期一会 4Kニューマスター版

1994年/アメリカ映画
配給：シンカ/142分

2022 (令和4) 年3月24日鑑賞

シネ・リーブル梅田

Data

2022-31

監督：ロバート・ゼメキス

出演：トム・ハンクス/サリー・フ
イールド/ロビン・ライト/
ゲイリー・シニーズ/ミケル
ティ・ウィリアムソン

👁️👁️ みどころ

一期一会は難しい言葉だが、日本では馴染み。しかし、フォレスト・ガンブって一体何？それは、若き日のトム・ハンクスが演じた主人公の名前だ。

なぜ1994年の本作が多く賞を取り、4Kニューマスター版で蘇ったの？それは、どんな時でも大切な人の言葉を胸に走り続けた奇跡が、私たちの心を感動で満たしてくれるためだ。

人生はチョコレートの箱のよう。開けてみないと中身はわからない。それが本作の名セリフだが、そのココロは？本作を鑑賞し、それを聞いた私は、チャン・イーモウ監督の『活きる』（94年）を思い出して対比してしまったが、それは一体なぜ？

“米中対立（冷戦）”が強まる中でも、映画のテーマはあくまで“米中共通”であってほしいものだが・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■この名作の原題は？意味は？■□■

1994年の第67回アカデミー賞で作品賞を含む計6部門を受賞した名作が、28年後の今、4Kニューマスター版で復活！去る3月13日に「午前十時の映画祭」で見た『イングリッシュ・ペイシェント』（96年）は約25年ぶりの再鑑賞だったが、本作の鑑賞は今回がはじめてだ。本作が日本で公開された1995年当時の私は、夜な夜な北新地で飲み歩き、カラオケ合戦をやっていたから、それも仕方ない。しかして、本作のタイトル『フォレスト・ガンブ』って一体何？また原題は『Forrest Gump』だが、邦題にはなぜ「一期一会」というサブタイトルがついているの？

フォレスト・ガンブはトム・ハンクス扮する主人公の名前だが、フォレストは白人至上主義団体の結成者として知られるネイサン・ベドフォード・フォレストの名前からとって

いるらしい。また、ガンブはアラバマ州の方言で「うすのろ」、「間抜け」「愚か者」を意味する言葉だから、はっきり言って、その名前は、あまりいいものではない。

本作導入部では、脚が不自由なため義足をつけている子供フォレストに対して、母親のガンブ夫人（サリー・フィールド）がかなり変わった教育方針で臨む姿が描かれるが、彼女はなぜ自分の子供にそんな名前をつけたの？

■邦題にはなぜ「一期一会」のサブタイトルを？■

他方、「一期一会」とは茶道に由来する日本のことわざで、「茶会に臨む際には、その機会は二度と繰り返されることのない、一生に一度の出会いであるということ」を心得て、亭主・客ともに互いに誠意を尽くす」という心構えを意味しており、その語源は、千利休の言葉にあるらしい。

難しい四字熟語だが、この一瞬を大切に思い、今できる最高のおもてなしをしましょう、という意味で広く使われている。本作をじっくり鑑賞してみれば、邦題に“一期一会”というサブタイトルをつけたことの意味が十分理解できるから、このサブタイトルは大正解。

したがって、本作のタイトルについては、原題についても邦題についても知ったかぶりをせず、しっかり確認する必要がある。

■トム・ハンクスの若さにビックリ！■

昭和は遠くなりにつれ。そう実感するのは、1950年代の映画で、若き日の石原裕次郎のかわいさを見た時だ。浅丘ルリ子と共演した『銀座の恋の物語』（62年）や、吉永小百合と共演した『若い人』（62年）等を観れば、その当時の彼の若さとかわいさにあらためて驚かされる。

それと同じように、トム・ハンクスの主演作を、『ハドソン川の奇跡』（16年）（『シネマ39』218頁）、『キャプテン・フィリップス』（13年）（『シネマ32』44頁）、『ターミナル』（04年）（『シネマ8』243頁）等で見慣れている今の私は、若き日のかわいさのトム・ハンクスの姿にビックリ！彼は1956年生まれだから、『グリーンマイル』（99年）（『シネマ1』34頁）で主演したのは44歳頃。その前の『プライベートライアン』（98年）（『シネマ1』117頁）の時は40歳頃だ。

しかして、彼が本作で主演した時は30歳代。石原裕次郎と同じように、彼の体型は今とは全然違い、超スリムだから、一瞬これは誰だ？と思ってしまうほどだった。本作の主演を誰が務めるかについてはかなりの激戦だったようだが、冒頭の、ベンチに座り、静かに語りかける彼の姿（演技）を見て、これはハマり役！

■1994年の公開！坂和目線で見ると本作 VS 『生きる』■

中国映画が大好きな私は中国映画を300本以上観ているが、そんな私は本作を観て、なぜかチャン・イーモウ監督の『生きる（活着）』（94年）（『シネマ5』111頁）を思い出してしまった。

それは、本作が1960～70～80年代のアメリカを背景として、フォレストという

若者の生き方を描いているのに対し、『活きる』は1940～50～60年代の激動する中国の歴史の中で、コン・リー扮するチャチェンとグォ・ヨウ扮するフークィの生き方を描いている点に共通点を見出したからだ。そんな思いで本作を鑑賞した後、両者を対比してみると、全然意識していなかったものの、両者の製作公開が同じ1994年だったからビックリ！

中国の1940～50～60年代は、対日抗戦、中華人民共和国の成立、国共内戦、大躍進運動、文化大革命という激動が続いた時代。それと同じように、東西冷戦に勝利した1960～70～80年代の米国は、ベトナム戦争反対、公民権運動が吹き荒れる中、ケネディ大統領の暗殺、ウォーターゲート事件等の大事件が相次いだ。本作には、少年時代のフォレストと母親の前に、大ブレイク直前の歌手、エルヴィス・プレスリーが登場する他、ケネディ大統領やジョンソン大統領、等の超有名人が次々と登場する。また、ベンジャミン・ブルー（ミケルティ・ウィリアムソン）と共にベトナム戦争に従事したフォレストは、ダン・テイラー中尉（ゲイリー・シニース）の下でさまざまな試練を受けることになる。『活きる』では、さまざまな試練のなかで生き抜く二人の主人公の姿が感動を呼んだが、それは本作も同じだ。

他方、本作では、多数の有名人の登場とは別に、アメフト全米代表、ベトナム戦争、卓球世界選手権出場、エビ漁船船長等の人生が“脚のギブスが吹き飛ぶほどのスピード”で描かれていくので、それに注目！しかも、それらすべてを貫く底辺にあるのは、少年時代からの唯一無二の親友だった女性ジェニー（ロビン・ライト）との恋だから、その感動もしっかりと！

■□■人生は1枚の軽い羽のようなもの・・・？■□■

ヴェルディ作曲のオペラ「リゴレット」の中で歌われる「La donna è mobile（女心の歌）」の歌詞は、「風の中の 羽のように いつも変わる 女心」。私はこれを中学生の時の音楽の授業で覚えたが、本作の冒頭は、1枚の軽い羽が風に舞いながらひらひらと落ちていく情景から始まる。そして、バス停のベンチに一人で座るフォレストの足元に落ちたそれを、フォレストが拾い、大切にカバンの中の絵本に挟んだところから、本作のストーリーが始まっていく。偶然、彼の隣に座った女性は否応なく彼の話を聞かされるのだから、ある意味で迷惑千万だが、それが意外に面白く、かつ有益であれば・・・。

本作でフォレストが語る“自叙伝”は内容豊富だから、長いけれども面白い。不自由な脚に義足をつけてやっと歩いていた子供時代のフォレストが、いじめっ子たちの追跡を受ける中、ジェニーから「走れ！走れ！」の声援を受けることによって、器具が外れたばかりか、人一倍の脚力で走れるようになっていくという風景は荒唐無稽だが、なぜかフォレストの語りは、それに説得力を持たせてしまうから不思議だ。まさに、人生は1枚の軽い羽のようなもの？すると、本作のラストで、その羽は・・・？

■□■人生はチョコレートの箱のよう！そのココロは？■□■

連日のウクライナ“戦争”の報道を見ていると、もしプーチン大統領がフォレストのような人間であったなら？もし世界中の人々がフォレストのような人間であったなら？と思わずにはいられない。フォレストは小学校に入った時から勉強が苦手だったし、足にギブスをはめた少年フォレストは周囲から馬鹿にされていた。しかし、その時に唯一無二の親友になった少女、ジェニーをはじめとして、フォレストは一度約束したことは決して破らず、とことん守り抜いたから偉い！そんな彼の生きざまが、ベトナム戦争時代の友人ベンジャミン・ブルーを生み、ベトナム戦争で両足を失ったダン・テイラー中尉と生涯の信頼関係を築くことができたわけだ。

フォレストが青年時代を生きた1970年代は、ベトナム戦争や公民権運動をはじめとする激動の時代だったし、ケネディ大統領の暗殺、キング牧師の暗殺等の暗い事件も多発した。しかし、そんな中でもフォレストは自分の生き方を貫いたし、ジェニーを心から大切に思う気持ちにいささかの変化もなかった。

しかして、本作が28年後の今、4Kニューマスター版で蘇ったのは一体なぜ？それは、「人生はチョコレートの箱のよう。開けてみないと中身は分からない。」という名セリフが今も脈々と生き続けているからだ。もっとも、これは意識であり、直訳すれば「人生は箱に入ったチョコレートみたいである。食べなければ知ることはできない。」だそう。また、原作でのフォレストのセリフは、「人生はチョコレート箱じゃない」という、全く逆の言葉らしい。

それもこれを含めて、まさに本作は“人生のバイブル”。そう言っても過言ではない名作をはじめて鑑賞できたことに感謝！

2022（令和4）年3月29日記